

チベットにおける仏教々団主の相続形態

——ドゥク派 (Jbrug-pa) におけるク・オン (khu-dbon) 相続をめぐって——

中 井 英 基

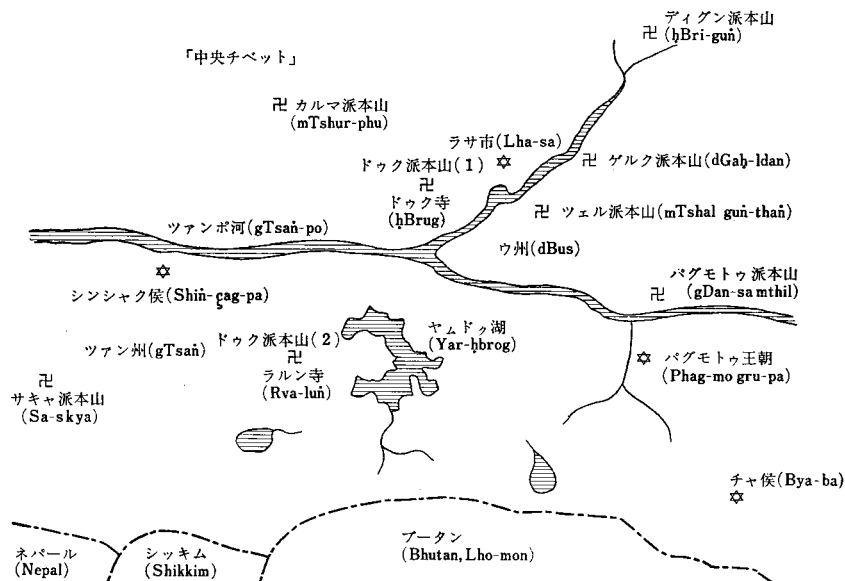
I はじめに

小稿は、チベットにおける仏教々団主の相続に関する予備的な研究である。かかるさやかな研究を試みた目的は、教団主の相続問題を検討することによって、教団の世俗化と宗教貴族制の成立との過程を解明するための糸口を探すことにある。

思うに、仏教々団とは、その本来の性格上、この輪廻の世界から解脱すべく、世間との交渉を断って修行に励む者たちの、相互研鑽を目的とする宗教団体のはずであった。一一・一二世紀のチベットに設立された仏教々団⁽¹⁾は、少なくともその設立当初において、事実そのよう

であったと思われる。然るに、それら教団の多くは、現実での、社会的存在としての営みの過程において、程度の差こそあれ、漸次、宗教団体としての性格を変質させていった。かかる変質の諸事例を検討すると、教団の外側からは無論のこと、内部においても、教団の世俗化を誘発するような契機が幾つか存在したようであった。例えば、教団主の地位の継承の問題は、その一つであったように思われる。何故ならば、次の二点、即ち、(一)教団主には、彼が管理する教団の共同財産とは別に、個人的な私有財産が存在し、教団主位の継承にこの財産も伴ったこと、⁽²⁾(二)このことと関連して、教団主位の継承が、表面上、師弟相承の形をとりながらも、実質的には、親

(83) チベットにおける仏教々団主の相続形態



子・兄弟・叔父甥のような血縁者の間で独占的に行なわれたことが多かったこと、以上の二点が知られているからである。これら教団主位を独占した者たちは、教団の宗教的権威や富を利用して、自己の世俗的勢力を育成し、遂には僧衣を纏った新しい支配階級に成長していった。一三世紀中葉、中国の元朝の支持を取り付けて、全チベットに君臨したサキャ派 (Sa-kyā-pa) 政權⁽⁴⁾や、その一世紀後に同派の権力を打倒したバグモトゥ王朝 (Phag-mo-bu-pa) ⁽⁵⁾などは、かかる宗教貴族の典型的な姿であったのである。

小稿は、以上の如き財産を伴う教団主位の継承を、仮に「相続」と名付けた上で、チベットの仏教々団では、教団主の相続が如何なる形態で行なわれたか、という問題を検討しようとするものである。勿論、この問題を取り上げるのは、小稿が最初ではない。また小稿のみでこの問題全体の委曲を尽すことは、到底不可能である。ここでは、先学の諸研究⁽⁶⁾に導びかれつつ、この問題の一部分、即ち、ドゥク派と呼ばれる宗派の教団主 (本山座主) の場合、如何なる形態の相続が行なわれたか、という極く小さい問題に限定して、若干の考察を試みたいと

思う。

なお、小稿が依拠した主な史料及びその略記号と、諸史料の性質は、次の通りである。

- (1) hGos lo-tsa-ba gShon-nu-dpal (1392—1481), *Deb-ther sion-po* (DN), 1476—78, 486 fol., Kun-bde-glin ed., vol. ña, trans. by G. N. Roerich, *The Blue Annals*, Calcutta, 1949 & 1953, 2 vols., Book VIII.
- (2) dPañ-bo gtsug-lag hphren-ba (1504—c.1566), *Chos-hbyun mkhas-pa'i dgañ-ston* (KG), 1545—65, L. Chandra ed., Part 2, vol. na, New Delhi, 1961.
- (3) Padma dkar-po (1527—1592), *Chos-hbyun bstan-pa'i padma ryags-pa'i ñin-nyes* (PK), 1580, 189 fol., sPun-thaṅ ed.
- (4) Sum-pa mkhan-po (1704—1788), *Reñu-mig* (RM), 1748, L. Chandra ed., Part III of *dPag-bsam Lyon-bzan*, New Delhi, 1959.
- (5) Thuñu-bkvan sprul-sku blo-bzan chos-kyi ñi-ma (1737—1802), *Grub-mthul gel-kyi me-lon* (GT), 1800 or 1802, 164 fol., sDe-dge ed., vol. ña.
- (6) *Rwa-lun gñan-rabs* (NT), 一四世紀—一六世紀^(*)

10 vols.

以上のうちで、(1)、(2)、(3)、(5)は所謂「仏教史」(*Chos-hbyun*)と称される文献であり、(4)は仏教史である本文に付けられた年表である。そして(6)は、「高僧伝」(*rNam-thar*)の部類に入る。

各史料の著者を簡単に紹介すれば、次の通りである。先ず、(3)の PK と (6)の NT の著者は、共にドゥク派所屬の高僧であり、同派に関する詳細な情報を提供している。然し、根本史料たる PK には、干支紀年法による年代がほとんど示されていないので、この点他史料に依った。なお、PK の著者は一六世紀の代表的な学匠であって、当時ドゥク派本山第一三代の転生した化身であると信じられていた。NT は、ドゥク派本山の歴代座主の伝記集で、第五代以下、第六、八、九、一〇、一一、一二、一五、一六、一七などの計一〇代のものが含まれている。これら伝記の各巻は、恐らく、各座主の歿後、次代の座主の時に書かれたものであると思われる。なお、本書の全体を示す時には、NT の略記号を使い、各代の伝記を示す時には、例えば第九代のそれは、NT, vol. 4 のように、vol. の通し番号で示すことにする。

次に他派の高僧の手になった史料を紹介しよう。先ず成立年代の最も古い(1)のDNの著者は、顕教系のカダム派(bka'-gdams-pa)の有名な碩学であり、ドゥク派の第一三代座主は、一時彼の下で時輪経の講義を受けたことがあった。(2)のKGの著者は、ドゥク派と同じくカギマ派(bka'-bgyud-pa)の一支派カルマ派(Karma-pa)の高僧で且つ化身でもあり、PKの著者と並び称される一六世紀の大学者であった。(4)のRMと(5)のGTは、各々顕教系のゲルク派(dge-lugs-pa)の高僧の手になるものである。以上の四種のうち、DNとKGは成立年代の関係上、ドゥク派本山の歴代座主について開祖よりほぼ第一三代までしか言及していない。そしてより後代の作であるRMは、DNの記述に盲従している感がある。最後のGTは、ドゥク派の宗義と歴史を要約した概説書である。

さて、以上述べた諸史料は、すべて記述の焦点を宗教関係の事柄にしぼり、社会的側面についてあまり触れていない。然しながら、他種の史料が全く欠けている現在、やはりチベット社会の研究は、これら宗教関係書を丹念に分析していく以外に途が無いように思われる。小稿も

可能な限り、教団の背後関係を追求したが、何分以上の如くに史料の少ないことが大きな壁となっている。然し、それにもまして、筆者の未熟さが多くの誤りと見落しを生んでいることであろう。一つの試論としての以下の研究に、厳しい御批判と御叱正とを戴ければ幸いである。

(1) チベットの諸宗派と仏教史については、G. Tucci氏の古典的名著 *Tibetan painted scrolls*, Roma, 1949, 3 vols. の第一部第一章「中央チベット史(一三世紀—一八世紀)」(pp. 3—80)と同第二章「宗派」(pp. 81—93)最近著わされた山口瑞鳳「チベット仏教」講座・東洋思想・仏教思想I』所収、東大出版会、一九六七年、pp. 231—283、などに精し。

(2) 佐藤長「ダルマ王の子孫について」『東洋学報』、第四六巻第四号、一九六四年三月、p. 67。

(3) G. Tucci, 山口、佐藤等三氏の前掲書・論文にかかる諸事例が豊富に示されている。

(4) G. Tucci, op. cit., 第一部第一章の第二、第五両節(pp. 7—17, pp. 31—39)

(5) バグモット王朝は、同名の教団を母胎として勢力を伸長させた。同王朝については、G. Tucci, op. cit., 第一部第一章第三、四、五の三節(pp. 17—39)と、佐藤長「元末明初のチベット状況」田村実造編『明代滿蒙史研究』、京大、昭和三十八年、pp. 485—585、に精し。

(9) Gr. Tucci, 山口、佐藤三氏による前掲の計四つの研究書と論文。

(7) 最近、E. G. Smith 氏の序文の付いたドック寺版のテキストが出版された。L. Chandra, ed., *Tibetan Chronicle of Padma dkar-po*, New Delhi, 1968. Smith 氏の序文は、一五・一六世紀のドック派の内情について詳細に言及している。本稿はドック派の第二期について氏の序文から多くの示唆を受けた。

(8) 本書の原典は、オランダのライデン市にある国立民族博物館に収められている。残念ながら、本書の *titles* は未だ我国に将来されていないが、筆者は幸にして東洋文庫の山口瑞鳳氏より同書の重要箇所を抜き書きした *notes* を拝借することが出来た。この *notes* は、ライデン大学文学部印度哲学研究室のチベットの助手が作製したものであるが、これと PK を始めとする諸史料と照合した結果、史料としての信憑性をほぼ確認することが出来た。勿論、将来原典の全 *copy* が手に入れば、この *notes* を改めて検討し直す必要があるが、現在の段階ではこの *notes* を使用しても大過ないものと思われる。山口氏の御好意に謝意を表した。

(6) PK, f. 186a.

II ドック派の成立とその歴史の概略

前述のように、一一・一二世紀に仏教々団が各地に設立されたが、本稿の扱うドック派も、この時期にカギユの法系に連なる一派として中央チベットに成立した教団であった。本山座主の相続の問題に立ち入る前に、ひとまずドック派を創始した開祖ツァンパ・ギャレー (gTsan-pa rGya-ras Ye-geś rdo-rje, 1161—1211)⁽¹⁾ とその後における経過のあらましについて簡単に触れる必要がある。ここではこの二点について述べたい。

まず、ツァンパ・ギャレーという名称は、ツァン州 (gTsan) の人、ギャ (Gya) 氏族出身の木綿を着た行者という意味である。彼の生地は、ツァン州のニャントウ (myan-stod) 地方で、家族は牧畜民 (hbrog-pa) であった。DN によれば、子沢山のために父は彼を粗略に扱い、あるシャーマニストに預けて、その養育を託したと言われている。長じて後、彼は仏門に帰し、各地の学匠を尋ねて受講した。二二歳の時に、彼はリンレーバ (glin-ras-pa Padma rdo-rje, 1128—1188)⁽²⁾ という人物に師事した。リンレーバは、カギユ派の名僧バグモトツン (Phag-mo grū-pa, 1110—1170)⁽³⁾ の高弟の一人で、優れた行者であった。ツァンパ・ギャレーは、この師の

許で修行し、カギユの法を授かり、大悟したと言われる。その後、彼は師の許を離れて各地を行脚し、人々に説法しつつ、仏道の奥義を究めた。この間、ドク派と同じくカギユ派の一分派であるツェル派 (mTshal-pa) の始祖ラム・シャン (bla-ma shan, 1123—1193) からカギユの教義に従って具足戒を受けた。カギユ派は、教義上、密教に属していたが、タントリズムの實踐と並行して戒律をも厳守する独自の立場にあった。従って、カギユ派の諸支派でも同様に戒を守ることが要求されたのである。普通出家した者は、先ず沙弥戒 (十戒) を守って修行に励み、最後に具足戒 (二五〇戒) を受けて比丘となった。沙弥、比丘のいずれにしても妻帯は全く問題外のことであった。ドク派の開祖ツァンパ・ギャレーは、こうしてタントリズムの修行僧でありながら、顕教的な立場の比丘となったのである。以後、彼は行と律を両立させて傑出した「清浄なる行者」(gsen-gom) として仰がれるようになった。その結果、彼の許には多数の行者・学僧が参じ、そこから逸材が輩出したので、ドク派の名がチベット中に轟いたとされている。

彼は、次の三つの寺院を建立したと言われている。

即ち、ドク (qBrug) ラルン (Rva-lun) ロンドル (klong-dol) の三寺である。これらのうち、最初のドク寺は、彼が二九歳 (一一八九年) の時に建てたものであるが、他の二寺の建立年代は不明である。いずれにせよ、彼の門弟たちは特にドク寺を中心に結集したので、ここにその寺名をとった教団が成立するに至った。これがドク派教団である。

ところで、寺院を建立するにも、また教団を組織し、維持するにも、当然世俗界の信者や施主たちの支持が不可欠の要因であったが、残念ながらこの点はよくわからなかった。然し、DZによれば、開祖はツァン州や牧畜民の間にかんがりの信者を擁していたようである。彼は、これら信者たちから布施や寄進を受けたり、紛争の仲介役を務めたりして莫大な富を得たが、彼はそれをただ仏法のために使用したと言われている。然し、これは、勿論、仏教関係書の多くが常套とする独得の言いまわしであって、こうして彼の許に蓄積された富、即ち教団の共同財産と彼個人の財産の両方が、当然彼の後継者に引き継がれていったものと容易に想像されうるのである。

さて、以上述べたように、ドク派はツァンパ・ギャ

レーによって一二世紀末葉に設立された。以後、第二代の時期に開祖の晩年の高弟二人が本山から独立して、各各一派を形成した⁽⁶⁾ことやその他の様々なことがあって、ドゥク派の歴史には盛衰消長の波があったが、ともかく開祖の法統は、現在まで連綿と続いていたのである。卓見によれば、かかるドゥク派の歴史は次の三期に大別出来ると思われる。即ち、第一期は開祖から第一二代までの時期で、後述するように開祖の出身家系（小稿は仮にギャ家 rGya-pa と記す）が教団主位の世襲制を通じて、小規模ながら宗教貴族として成長していった。第二期は、第一三代ギャルワン・クンベル（rGyal-dban Kun-dpal, 1428—1476）⁽⁷⁾から第一八代カワン・ナムギャル（Nag-dban nam-rgyal, 1594—1651）⁽⁸⁾までの時期である。第一三代は、ドゥク派中興の祖ともされるべき人物で、彼の時期を境に教団は飛躍的な発展を遂げた。この場合の発展の原動力となったのは、化身（sprul-sku）と転生（yañ-rid）の思想であった。即ち、第一三代は、インドの有名な行者ナローパ（Nāropā）の、究極的には観音菩薩の化身であったとされる開祖の転生であると自称したのである。⁽⁹⁾彼はこうして自己を神格化した上で、

従来から勢力の滲透していたチベット南部一帯に積極的な布教を展開して、南部の上下各層に広く信者を獲得した⁽¹⁰⁾。後に彼の転生⁽¹¹⁾が順次現われて、教団の勢威は益々高まり、ギャ家一族も経済的繁栄を享受した。PKの著者が現われて、ドゥク派の宗学を大成したのもこの時期である⁽¹²⁾。然し、間もなくギャ家自体に財産争いが起り、またギャ家と化身の系統との間に反目が生じて、ドゥク派には次第に分裂の様相が見えるようになった。そして、ギャ家は、化身の認定をめぐって、当時最大の實力者であったツァン州のシンシャク侯（Shin-shag-pa）と対立するに至り、遂に第一八代及び彼を支持したグループは国外にある唯一の勢力圏のブータン（Bhutan, lHo-hon）に亡命せざるをえなかった（一六一六年）⁽¹³⁾。その後、ドゥク派はブータンに亡命した南派と、チベットに残留し、後に西方のラダック（Ladak, La-tag）に活路を見い出した北派との二つに分裂し、今日に及んでいる。この第一八代以後における南北分裂の時期が、第三期である。

ほぼ以上が、ドゥク派史のあらましであるが、筆者は、然しながら、史料上の制約があって、これら三期全体を

通じて教団主の相統問題を説明することが出来なかった。以下の考察は、それ故に、諸史料の比較的集中している第一期のみを対象とした。第二、第三の両期に関する検討は、将来の課題として残すことにしたい。

- (1) DN, ff. 115 b-117 b; KG, pp. 417-418; PK, ff. 174 b-177 a; GT, ff. 14 a-14 b; RM, pp. 17, 22.
- (2) DN, ff. 113 a-115 b; KG, pp. 416-417; PK, ff. 172 a-174 b; GT, ff. 13 b-14 a; RN, pp. 14, 19.
- (3) バグモトツェンは、一五八八年に gDan-sa mñhil 寺を建立した。この寺を中心に、設立者の名をとった教団が成立したのである。これがバグモトツェ派である。同派及び同派を基盤とした王朝については、前章の註(5)を参照のこと。
- (4) ラン・シヤンは、名門ツェル氏族の出身で、バグモトツェの高弟の一人となった。一七五五年に彼は mTshal gñu-thaṅ 寺を建立して一派を立った。そのツェル派に属する G. Tucci, op. cit., pp. 8-9, 629-630, 688 に詳しく述べられている。
- (5) E. G. Smith, "Foreword", p. 7. I の註(7)を参照のこと。
- (6) 開祖には六人の高弟がいたが、その中でもゴーツァン・ツェ (rGod-tshan-pa, 1189-1258) とローン・パ (Lo-ras-pa, 1187-1250) の二人は傑出してゐたとされる。両者は、第

二代座主の時に本山から独立して、各々一派を築いた。前者の法脈は「トゴツェン派」(sToḡ-tñen-pa) と、後者のそれは「トゴツェン派」(sMad-tñen-pa) と各々称された。この両派に対して、本山の法脈は「中のツェン派」(Bar-tñen-pa) と呼ばれた。本稿はこの本山系統を中心に検討した。G. Tucci, DN, ff. 118 a, 122 a; KG, pp. 418, 422, 423; PK, ff. 177 a, 179 b, 183 a; GT, ff. 14 b, 15 a, 16 a 参照のこと。

- (7) DN, f. 118 b; KG, p. 419; PK, ff. 185 b-187 a; RM, pp. 45, 51; GT, f. 14 b.

(8) bsTan-pdzin chos-rgyal, *lHoje Chos-hgyun* (Bhutan ed., 1791-1819, 151 fol.) の書物の ff. 12 a-54 a に彼の伝記が収められている。なお、これまでに明らかにした限りにおいて、第一三代以後第十七代までの座主職には、次の者たちが就いたと思われる。限ち、第一四代 Nag-dban chos-kyi rgyal-po (c. 1464-c. 1539) 第一五代 bjam-dbyans chos-kyi grags-pa (1478-1523) 第一六代 Nag-dban bstan-paḥi rgyal-mshun (1506-1538) 第一七代 Mi-pham chos-kyi rgyal-po (1543-?) などである。

- (9) E. G. Smith, op. cit., p. 2.
- (10) NT, vol. 8, f. 6 a に「約三万戸を支配したと言われる南部の大貴族チャ侯 (Bya-ba) が、第一三代の信者の一人となっていた。この時の当主の子供の一人が後に

第一三代の転生した化身であると自ら宣言し、ドゥク派教団もこれを認めた。これがドゥク派における実質的に最初の転生ラマで、後に第一五代座主となった。

(11) 第一五代の次の転生は、PKの著者ベマカルボであり、その次はバクサム・ワンボ (dPag-bsam dban-po, 1593—1641) であった。この最後に挙げた転生者の認定の際に、ギャ家側を代表してPKの著者の化身であると自から称した第一八代と、バクサム・ワンボ側とが対立し、結局後者に味方したシンシヤク侯が武力で結着をつけた。

(12) G. Tucci, op. cit., pp. 125—128.

(13) Padma dkar-po ed., *Kun-dga'i legs-pa'i nam-thar* (169 fol., 1592), ff. 3a—3b, 5b, 67a.

(14) E. G. Smith, op. cit., pp. 2—4.

(15) Ibid., p. 4; Hsüehi Chos-phyun, ff. 22a—23b.

III 第一期における本山座主の系譜と相統

さて、いよいよ第一期(一二世紀末葉—一五世紀初葉)における相統の問題を検討することにした。ここで吟味の対象とする本山座主は、開祖、即ち、本山初代座主から第一二代までの計一二名である。叙述の便宜上次の三つの問題視角から相統問題を順次検討してみることとしたい。即ち、第一は、一般にカギュ派及びその一

支派としてのドゥク派では、教団主の相統が如何なる形態で行なわれたと言われているか、という点について、先ず他宗派の著者による史料を紹介すること、第二に、それでは実際に如何なる形態の相統が行なわれたか、という事実関係の点について、ドゥク派所属の著者によるPKとNTの二つを中心に跡づけること、そして第三にこのように跡づけられた相統が、相統制度として一体如何なる意義を持っていたのか、という点について、教団の背景と関連させながら若干の考察を試みることに、ほぼ以上の諸問題である。

(i) カギュ派とク・オン相統

チベットの仏教々団は、教義上、顕教系と密教系との二つのグループに分けられる。前者の教団では、例えば、カダム派、ゲルク派などでは戒律が厳守されるために、普通、教団主の相統は師弟間で行なわれたとされている。他方後者の教団、例えば、サキャ派やニンマ派(Nin-ma-pa)ではタントリズムの実践のみが重視されたので、教団主の妻帯が許され、親子間の相統が行なわれたともされている。然るに、カギュ派は、両者と若干趣きを異

にしていた。即ち、カギユ派の教義の特徴は、前述のようにタントリズムの実践と戒律とを両立させる点にあったので、教団主の妻帯は許されなかったのである。そしてカギユ派に属する諸教団で広く行なわれた相統形態は、「ク・オン」(khu-dbon)、即ち、「クオ」(khu-bo, または a-khu) と「オンポ」(dbon-po) との間の相統であったとされている。イタリアのトゥッチ教授は、これを「叔父と甥の間に定常化された宗教上の相統」と解釈し、以後これが定説となった。このク・オン相統、即ち、叔父(または伯父)・甥相統とは、一家系が出家と在家の二系に分れ、出家者は教団主を相統して生涯戒を守り、在家者は妻帯して血統を維持し、順次教団主の後継者を供給していく、という相統制度であった。本稿の追求するドク派は、以上の如きカギユ派の一支派として成立したので、当然のことながら、多くの史料に、ドク派でもこの叔父・甥相統が行なわれた、とされているのである。その例として、次に他派の著者による史料の関連記述を要約して紹介してみよう。

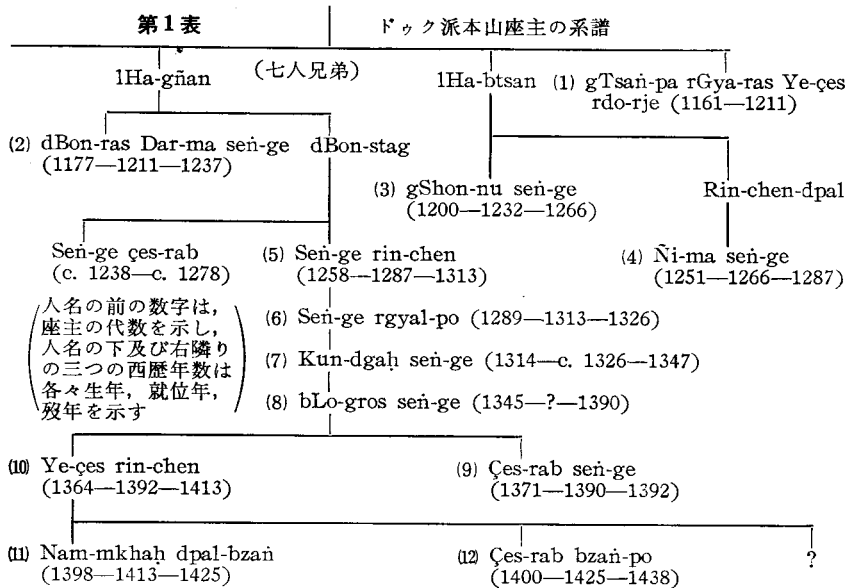
まず、一五世紀末にカダム派の著者によって書かれた DN には、第二、第三、第四の三代が、各々前代にっ

てのオンポであったとされ、第五代以後は単に生歿年が記されているだけである。⁽²⁾ 即ち、DN は、少なくとも開祖から第四代までの間、ク・オン相統が行なわれたとしているのである。

次にドク派と同じくカギユ派に属するカルマ派の高僧が著した DQ を見ると、そこには第二代が開祖のオンポであり、以後各々のオンポが順次相統して、ク・オン相統が第一三代まで貫かれた、と述べられている。⁽³⁾

最後に一九世紀初め、ゲルク派の学僧によって書かれた DQ によれば、第二代が開祖のオンポであるダルマ・センゲ (Dar-ma seng-ge) という人で、彼以後オンポの子孫 (dbon-brynd) が順次現われた、と記されている。⁽⁴⁾ この記述は、極めて曖昧なために、ク・オン相統が第二代以後も継続されたか否か、ここでは必ずしも明瞭ではない。

以上三種の史料のうち、最後の DQ を除くと、ドク派における教団主の相統形態として、DN によれば、第四代まで、DQ によれば更に第一三代までク・オン相統が継続されていたことになる。それでは一体事実はどうであったのだろうか。



(ii) ドック派の場合——ク・オン相統と親子・兄弟相統

開祖以後歴代の座主の血縁関係を系統的に記述しているのは、同派の学匠ベマカルボが一六世紀末葉に著した *PK* のみである。同じく同派の著者による *DN* が、五代代から第一二代までの、途中で第七代を除く計七名の座主についてのみ、先の *PK* の記述を裏付けし、且つ補足している。*PK* は、血縁関係の外に、座主職就位の順序も記しているが、然し、歴代座主の生歿年についてほとんど触れていないので、この点、むしろ主として干支紀年法による生歿年を中心に記述している *DN*, *KG*, *RM* などの諸史料に依りつつ、今、第一期における歴代座主の系譜を描けば、第一表の如くなるであろう。

ここに見られるように、第二、第三、第四、第五代の四代の座主は、各々前代にとって、甥、従兄弟、甥、又従兄弟であった。然し、第五代は実子に相統させていた。この間の事情を、*PK* は、第五代以後他にオンボがいなかったの、妻帯して一子を儲けた、と伝えている。⁽⁶⁾ 以後、この親子相統は第一二代まで継承された。これらの

相統が、表面上、師弟相統の形をとったことは言うまでもない。但し、その間、第九代と第一〇の両代、第一一と第一二の両代は、各々兄弟であり、その間で相統が行なわれている。然し、この場合の兄弟相統は、第九代、第一一代の何れも座主就位後若くして歿し、子孫を残さなかったもので、親子相統のいわば変型と考えても良いと思われる。

ところで、カギユ派所属の諸教団では、ク・オン相統が広く行なわれたと言われていること、またその一宗であるドク派でも、DNとKGによれば、ク・オン相統が少なくとも開祖から第四代までの間に行なわれたこと、この二点を先に指摘しておいた。然しながら、もし、ク・オン相統を定説に従って厳密に「叔父・甥相統」と定義して、第一表に見られる事実関係を適用すれば、ドク派ではク・オン相統がわずかに第二代と第四代の兩名だけに行なわれたにすぎないことになる。果して本当にそうだったのだろうか。またこのことと関連して第六代以後における親子・兄弟相統は、一体如何なる事情の下で行なわれたのだろうか。それは、戒律の緩慢な他の密教系諸教団で当初から行なわれていた親子相統と、全く同

じ性格のものであったのだろうか。次にこれらの問題を検討することにした。

まず、ク・オン相統の問題を吟味しよう。確かに血縁関係に精しい⁽⁷⁾HNにおいて、前代にとってのオンポであったと明記されている座主は、第一期において、わずかに第二代のみである⁽⁸⁾。従って、この限りでは、PKと先のDN、KGの記述とは対立することになる。然しながら、そのPKには、オンポの用語法について注目すべき二つの箇所がある。一つは、第五代が妻帯した理由として先に引用した、第五代以後他にオンポがいなかったから云々、という箇所である。これによれば、第五代以前の相統は、あたかもすべてク・オンのそれであったかのような印象を与える。もう一つは、第八代が座主職に就位する前の一時期に、「父系の遠縁にあたるオンポ」(pa-byshan rin-por hgro-bahi dbon-po)が本山を預かった、と記されている箇所である⁽⁹⁾。もし、この場合のオンポが本来近親者であるはずの「甥」の意味ならば、特に「父系の遠縁にあたる」と断わることは、自己矛盾に陥いることになる。またHN及びKGによる限り、第八代の父、即ち、第七代には兄弟がなかったから、第八代に

としての「甥」は初めから存在しなかった。更にもし「父系の遠縁」であることが確かであるならば、同じく¹⁰ ¹¹ ¹² ¹³ ¹⁴ ¹⁵ ¹⁶ ¹⁷ ¹⁸ ¹⁹ ²⁰ ²¹ ²² ²³ ²⁴ ²⁵ ²⁶ ²⁷ ²⁸ ²⁹ ³⁰ ³¹ ³² ³³ ³⁴ ³⁵ ³⁶ ³⁷ ³⁸ ³⁹ ⁴⁰ ⁴¹ ⁴² ⁴³ ⁴⁴ ⁴⁵ ⁴⁶ ⁴⁷ ⁴⁸ ⁴⁹ ⁵⁰ ⁵¹ ⁵² ⁵³ ⁵⁴ ⁵⁵ ⁵⁶ ⁵⁷ ⁵⁸ ⁵⁹ ⁶⁰ ⁶¹ ⁶² ⁶³ ⁶⁴ ⁶⁵ ⁶⁶ ⁶⁷ ⁶⁸ ⁶⁹ ⁷⁰ ⁷¹ ⁷² ⁷³ ⁷⁴ ⁷⁵ ⁷⁶ ⁷⁷ ⁷⁸ ⁷⁹ ⁸⁰ ⁸¹ ⁸² ⁸³ ⁸⁴ ⁸⁵ ⁸⁶ ⁸⁷ ⁸⁸ ⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹ ⁹² ⁹³ ⁹⁴ ⁹⁵ ⁹⁶ ⁹⁷ ⁹⁸ ⁹⁹ ¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰² ¹⁰³ ¹⁰⁴ ¹⁰⁵ ¹⁰⁶ ¹⁰⁷ ¹⁰⁸ ¹⁰⁹ ¹¹⁰ ¹¹¹ ¹¹² ¹¹³ ¹¹⁴ ¹¹⁵ ¹¹⁶ ¹¹⁷ ¹¹⁸ ¹¹⁹ ¹²⁰ ¹²¹ ¹²² ¹²³ ¹²⁴ ¹²⁵ ¹²⁶ ¹²⁷ ¹²⁸ ¹²⁹ ¹³⁰ ¹³¹ ¹³² ¹³³ ¹³⁴ ¹³⁵ ¹³⁶ ¹³⁷ ¹³⁸ ¹³⁹ ¹⁴⁰ ¹⁴¹ ¹⁴² ¹⁴³ ¹⁴⁴ ¹⁴⁵ ¹⁴⁶ ¹⁴⁷ ¹⁴⁸ ¹⁴⁹ ¹⁵⁰ ¹⁵¹ ¹⁵² ¹⁵³ ¹⁵⁴ ¹⁵⁵ ¹⁵⁶ ¹⁵⁷ ¹⁵⁸ ¹⁵⁹ ¹⁶⁰ ¹⁶¹ ¹⁶² ¹⁶³ ¹⁶⁴ ¹⁶⁵ ¹⁶⁶ ¹⁶⁷ ¹⁶⁸ ¹⁶⁹ ¹⁷⁰ ¹⁷¹ ¹⁷² ¹⁷³ ¹⁷⁴ ¹⁷⁵ ¹⁷⁶ ¹⁷⁷ ¹⁷⁸ ¹⁷⁹ ¹⁸⁰ ¹⁸¹ ¹⁸² ¹⁸³ ¹⁸⁴ ¹⁸⁵ ¹⁸⁶ ¹⁸⁷ ¹⁸⁸ ¹⁸⁹ ¹⁹⁰ ¹⁹¹ ¹⁹² ¹⁹³ ¹⁹⁴ ¹⁹⁵ ¹⁹⁶ ¹⁹⁷ ¹⁹⁸ ¹⁹⁹ ²⁰⁰ ²⁰¹ ²⁰² ²⁰³ ²⁰⁴ ²⁰⁵ ²⁰⁶ ²⁰⁷ ²⁰⁸ ²⁰⁹ ²¹⁰ ²¹¹ ²¹² ²¹³ ²¹⁴ ²¹⁵ ²¹⁶ ²¹⁷ ²¹⁸ ²¹⁹ ²²⁰ ²²¹ ²²² ²²³ ²²⁴ ²²⁵ ²²⁶ ²²⁷ ²²⁸ ²²⁹ ²³⁰ ²³¹ ²³² ²³³ ²³⁴ ²³⁵ ²³⁶ ²³⁷ ²³⁸ ²³⁹ ²⁴⁰ ²⁴¹ ²⁴² ²⁴³ ²⁴⁴ ²⁴⁵ ²⁴⁶ ²⁴⁷ ²⁴⁸ ²⁴⁹ ²⁵⁰ ²⁵¹ ²⁵² ²⁵³ ²⁵⁴ ²⁵⁵ ²⁵⁶ ²⁵⁷ ²⁵⁸ ²⁵⁹ ²⁶⁰ ²⁶¹ ²⁶² ²⁶³ ²⁶⁴ ²⁶⁵ ²⁶⁶ ²⁶⁷ ²⁶⁸ ²⁶⁹ ²⁷⁰ ²⁷¹ ²⁷² ²⁷³ ²⁷⁴ ²⁷⁵ ²⁷⁶ ²⁷⁷ ²⁷⁸ ²⁷⁹ ²⁸⁰ ²⁸¹ ²⁸² ²⁸³ ²⁸⁴ ²⁸⁵ ²⁸⁶ ²⁸⁷ ²⁸⁸ ²⁸⁹ ²⁹⁰ ²⁹¹ ²⁹² ²⁹³ ²⁹⁴ ²⁹⁵ ²⁹⁶ ²⁹⁷ ²⁹⁸ ²⁹⁹ ³⁰⁰ ³⁰¹ ³⁰² ³⁰³ ³⁰⁴ ³⁰⁵ ³⁰⁶ ³⁰⁷ ³⁰⁸ ³⁰⁹ ³¹⁰ ³¹¹ ³¹² ³¹³ ³¹⁴ ³¹⁵ ³¹⁶ ³¹⁷ ³¹⁸ ³¹⁹ ³²⁰ ³²¹ ³²² ³²³ ³²⁴ ³²⁵ ³²⁶ ³²⁷ ³²⁸ ³²⁹ ³³⁰ ³³¹ ³³² ³³³ ³³⁴ ³³⁵ ³³⁶ ³³⁷ ³³⁸ ³³⁹ ³⁴⁰ ³⁴¹ ³⁴² ³⁴³ ³⁴⁴ ³⁴⁵ ³⁴⁶ ³⁴⁷ ³⁴⁸ ³⁴⁹ ³⁵⁰ ³⁵¹ ³⁵² ³⁵³ ³⁵⁴ ³⁵⁵ ³⁵⁶ ³⁵⁷ ³⁵⁸ ³⁵⁹ ³⁶⁰ ³⁶¹ ³⁶² ³⁶³ ³⁶⁴ ³⁶⁵ ³⁶⁶ ³⁶⁷ ³⁶⁸ ³⁶⁹ ³⁷⁰ ³⁷¹ ³⁷² ³⁷³ ³⁷⁴ ³⁷⁵ ³⁷⁶ ³⁷⁷ ³⁷⁸ ³⁷⁹ ³⁸⁰ ³⁸¹ ³⁸² ³⁸³ ³⁸⁴ ³⁸⁵ ³⁸⁶ ³⁸⁷ ³⁸⁸ ³⁸⁹ ³⁹⁰ ³⁹¹ ³⁹² ³⁹³ ³⁹⁴ ³⁹⁵ ³⁹⁶ ³⁹⁷ ³⁹⁸ ³⁹⁹ ⁴⁰⁰ ⁴⁰¹ ⁴⁰² ⁴⁰³ ⁴⁰⁴ ⁴⁰⁵ ⁴⁰⁶ ⁴⁰⁷ ⁴⁰⁸ ⁴⁰⁹ ⁴¹⁰ ⁴¹¹ ⁴¹² ⁴¹³ ⁴¹⁴ ⁴¹⁵ ⁴¹⁶ ⁴¹⁷ ⁴¹⁸ ⁴¹⁹ ⁴²⁰ ⁴²¹ ⁴²² ⁴²³ ⁴²⁴ ⁴²⁵ ⁴²⁶ ⁴²⁷ ⁴²⁸ ⁴²⁹ ⁴³⁰ ⁴³¹ ⁴³² ⁴³³ ⁴³⁴ ⁴³⁵ ⁴³⁶ ⁴³⁷ ⁴³⁸ ⁴³⁹ ⁴⁴⁰ ⁴⁴¹ ⁴⁴² ⁴⁴³ ⁴⁴⁴ ⁴⁴⁵ ⁴⁴⁶ ⁴⁴⁷ ⁴⁴⁸ ⁴⁴⁹ ⁴⁵⁰ ⁴⁵¹ ⁴⁵² ⁴⁵³ ⁴⁵⁴ ⁴⁵⁵ ⁴⁵⁶ ⁴⁵⁷ ⁴⁵⁸ ⁴⁵⁹ ⁴⁶⁰ ⁴⁶¹ ⁴⁶² ⁴⁶³ ⁴⁶⁴ ⁴⁶⁵ ⁴⁶⁶ ⁴⁶⁷ ⁴⁶⁸ ⁴⁶⁹ ⁴⁷⁰ ⁴⁷¹ ⁴⁷² ⁴⁷³ ⁴⁷⁴ ⁴⁷⁵ ⁴⁷⁶ ⁴⁷⁷ ⁴⁷⁸ ⁴⁷⁹ ⁴⁸⁰ ⁴⁸¹ ⁴⁸² ⁴⁸³ ⁴⁸⁴ ⁴⁸⁵ ⁴⁸⁶ ⁴⁸⁷ ⁴⁸⁸ ⁴⁸⁹ ⁴⁹⁰ ⁴⁹¹ ⁴⁹² ⁴⁹³ ⁴⁹⁴ ⁴⁹⁵ ⁴⁹⁶ ⁴⁹⁷ ⁴⁹⁸ ⁴⁹⁹ ⁵⁰⁰ ⁵⁰¹ ⁵⁰² ⁵⁰³ ⁵⁰⁴ ⁵⁰⁵ ⁵⁰⁶ ⁵⁰⁷ ⁵⁰⁸ ⁵⁰⁹ ⁵¹⁰ ⁵¹¹ ⁵¹² ⁵¹³ ⁵¹⁴ ⁵¹⁵ ⁵¹⁶ ⁵¹⁷ ⁵¹⁸ ⁵¹⁹ ⁵²⁰ ⁵²¹ ⁵²² ⁵²³ ⁵²⁴ ⁵²⁵ ⁵²⁶ ⁵²⁷ ⁵²⁸ ⁵²⁹ ⁵³⁰ ⁵³¹ ⁵³² ⁵³³ ⁵³⁴ ⁵³⁵ ⁵³⁶ ⁵³⁷ ⁵³⁸ ⁵³⁹ ⁵⁴⁰ ⁵⁴¹ ⁵⁴² ⁵⁴³ ⁵⁴⁴ ⁵⁴⁵ ⁵⁴⁶ ⁵⁴⁷ ⁵⁴⁸ ⁵⁴⁹ ⁵⁵⁰ ⁵⁵¹ ⁵⁵² ⁵⁵³ ⁵⁵⁴ ⁵⁵⁵ ⁵⁵⁶ ⁵⁵⁷ ⁵⁵⁸ ⁵⁵⁹ ⁵⁶⁰ ⁵⁶¹ ⁵⁶² ⁵⁶³ ⁵⁶⁴ ⁵⁶⁵ ⁵⁶⁶ ⁵⁶⁷ ⁵⁶⁸ ⁵⁶⁹ ⁵⁷⁰ ⁵⁷¹ ⁵⁷² ⁵⁷³ ⁵⁷⁴ ⁵⁷⁵ ⁵⁷⁶ ⁵⁷⁷ ⁵⁷⁸ ⁵⁷⁹ ⁵⁸⁰ ⁵⁸¹ ⁵⁸² ⁵⁸³ ⁵⁸⁴ ⁵⁸⁵ ⁵⁸⁶ ⁵⁸⁷ ⁵⁸⁸ ⁵⁸⁹ ⁵⁹⁰ ⁵⁹¹ ⁵⁹² ⁵⁹³ ⁵⁹⁴ ⁵⁹⁵ ⁵⁹⁶ ⁵⁹⁷ ⁵⁹⁸ ⁵⁹⁹ ⁶⁰⁰ ⁶⁰¹ ⁶⁰² ⁶⁰³ ⁶⁰⁴ ⁶⁰⁵ ⁶⁰⁶ ⁶⁰⁷ ⁶⁰⁸ ⁶⁰⁹ ⁶¹⁰ ⁶¹¹ ⁶¹² ⁶¹³ ⁶¹⁴ ⁶¹⁵ ⁶¹⁶ ⁶¹⁷ ⁶¹⁸ ⁶¹⁹ ⁶²⁰ ⁶²¹ ⁶²² ⁶²³ ⁶²⁴ ⁶²⁵ ⁶²⁶ ⁶²⁷ ⁶²⁸ ⁶²⁹ ⁶³⁰ ⁶³¹ ⁶³² ⁶³³ ⁶³⁴ ⁶³⁵ ⁶³⁶ ⁶³⁷ ⁶³⁸ ⁶³⁹ ⁶⁴⁰ ⁶⁴¹ ⁶⁴² ⁶⁴³ ⁶⁴⁴ ⁶⁴⁵ ⁶⁴⁶ ⁶⁴⁷ ⁶⁴⁸ ⁶⁴⁹ ⁶⁵⁰ ⁶⁵¹ ⁶⁵² ⁶⁵³ ⁶⁵⁴ ⁶⁵⁵ ⁶⁵⁶ ⁶⁵⁷ ⁶⁵⁸ ⁶⁵⁹ ⁶⁶⁰ ⁶⁶¹ ⁶⁶² ⁶⁶³ ⁶⁶⁴ ⁶⁶⁵ ⁶⁶⁶ ⁶⁶⁷ ⁶⁶⁸ ⁶⁶⁹ ⁶⁷⁰ ⁶⁷¹ ⁶⁷² ⁶⁷³ ⁶⁷⁴ ⁶⁷⁵ ⁶⁷⁶ ⁶⁷⁷ ⁶⁷⁸ ⁶⁷⁹ ⁶⁸⁰ ⁶⁸¹ ⁶⁸² ⁶⁸³ ⁶⁸⁴ ⁶⁸⁵ ⁶⁸⁶ ⁶⁸⁷ ⁶⁸⁸ ⁶⁸⁹ ⁶⁹⁰ ⁶⁹¹ ⁶⁹² ⁶⁹³ ⁶⁹⁴ ⁶⁹⁵ ⁶⁹⁶ ⁶⁹⁷ ⁶⁹⁸ ⁶⁹⁹ ⁷⁰⁰ ⁷⁰¹ ⁷⁰² ⁷⁰³ ⁷⁰⁴ ⁷⁰⁵ ⁷⁰⁶ ⁷⁰⁷ ⁷⁰⁸ ⁷⁰⁹ ⁷¹⁰ ⁷¹¹ ⁷¹² ⁷¹³ ⁷¹⁴ ⁷¹⁵ ⁷¹⁶ ⁷¹⁷ ⁷¹⁸ ⁷¹⁹ ⁷²⁰ ⁷²¹ ⁷²² ⁷²³ ⁷²⁴ ⁷²⁵ ⁷²⁶ ⁷²⁷ ⁷²⁸ ⁷²⁹ ⁷³⁰ ⁷³¹ ⁷³² ⁷³³ ⁷³⁴ ⁷³⁵ ⁷³⁶ ⁷³⁷ ⁷³⁸ ⁷³⁹ ⁷⁴⁰ ⁷⁴¹ ⁷⁴² ⁷⁴³ ⁷⁴⁴ ⁷⁴⁵ ⁷⁴⁶ ⁷⁴⁷ ⁷⁴⁸ ⁷⁴⁹ ⁷⁵⁰ ⁷⁵¹ ⁷⁵² ⁷⁵³ ⁷⁵⁴ ⁷⁵⁵ ⁷⁵⁶ ⁷⁵⁷ ⁷⁵⁸ ⁷⁵⁹ ⁷⁶⁰ ⁷⁶¹ ⁷⁶² ⁷⁶³ ⁷⁶⁴ ⁷⁶⁵ ⁷⁶⁶ ⁷⁶⁷ ⁷⁶⁸ ⁷⁶⁹ ⁷⁷⁰ ⁷⁷¹ ⁷⁷² ⁷⁷³ ⁷⁷⁴ ⁷⁷⁵ ⁷⁷⁶ ⁷⁷⁷ ⁷⁷⁸ ⁷⁷⁹ ⁷⁸⁰ ⁷⁸¹ ⁷⁸² ⁷⁸³ ⁷⁸⁴ ⁷⁸⁵ ⁷⁸⁶ ⁷⁸⁷ ⁷⁸⁸ ⁷⁸⁹ ⁷⁹⁰ ⁷⁹¹ ⁷⁹² ⁷⁹³ ⁷⁹⁴ ⁷⁹⁵ ⁷⁹⁶ ⁷⁹⁷ ⁷⁹⁸ ⁷⁹⁹ ⁸⁰⁰ ⁸⁰¹ ⁸⁰² ⁸⁰³ ⁸⁰⁴ ⁸⁰⁵ ⁸⁰⁶ ⁸⁰⁷ ⁸⁰⁸ ⁸⁰⁹ ⁸¹⁰ ⁸¹¹ ⁸¹² ⁸¹³ ⁸¹⁴ ⁸¹⁵ ⁸¹⁶ ⁸¹⁷ ⁸¹⁸ ⁸¹⁹ ⁸²⁰ ⁸²¹ ⁸²² ⁸²³ ⁸²⁴ ⁸²⁵ ⁸²⁶ ⁸²⁷ ⁸²⁸ ⁸²⁹ ⁸³⁰ ⁸³¹ ⁸³² ⁸³³ ⁸³⁴ ⁸³⁵ ⁸³⁶ ⁸³⁷ ⁸³⁸ ⁸³⁹ ⁸⁴⁰ ⁸⁴¹ ⁸⁴² ⁸⁴³ ⁸⁴⁴ ⁸⁴⁵ ⁸⁴⁶ ⁸⁴⁷ ⁸⁴⁸ ⁸⁴⁹ ⁸⁵⁰ ⁸⁵¹ ⁸⁵² ⁸⁵³ ⁸⁵⁴ ⁸⁵⁵ ⁸⁵⁶ ⁸⁵⁷ ⁸⁵⁸ ⁸⁵⁹ ⁸⁶⁰ ⁸⁶¹ ⁸⁶² ⁸⁶³ ⁸⁶⁴ ⁸⁶⁵ ⁸⁶⁶ ⁸⁶⁷ ⁸⁶⁸ ⁸⁶⁹ ⁸⁷⁰ ⁸⁷¹ ⁸⁷² ⁸⁷³ ⁸⁷⁴ ⁸⁷⁵ ⁸⁷⁶ ⁸⁷⁷ ⁸⁷⁸ ⁸⁷⁹ ⁸⁸⁰ ⁸⁸¹ ⁸⁸² ⁸⁸³ ⁸⁸⁴ ⁸⁸⁵ ⁸⁸⁶ ⁸⁸⁷ ⁸⁸⁸ ⁸⁸⁹ ⁸⁹⁰ ⁸⁹¹ ⁸⁹² ⁸⁹³ ⁸⁹⁴ ⁸⁹⁵ ⁸⁹⁶ ⁸⁹⁷ ⁸⁹⁸ ⁸⁹⁹ ⁹⁰⁰ ⁹⁰¹ ⁹⁰² ⁹⁰³ ⁹⁰⁴ ⁹⁰⁵ ⁹⁰⁶ ⁹⁰⁷ ⁹⁰⁸ ⁹⁰⁹ ⁹¹⁰ ⁹¹¹ ⁹¹² ⁹¹³ ⁹¹⁴ ⁹¹⁵ ⁹¹⁶ ⁹¹⁷ ⁹¹⁸ ⁹¹⁹ ⁹²⁰ ⁹²¹ ⁹²² ⁹²³ ⁹²⁴ ⁹²⁵ ⁹²⁶ ⁹²⁷ ⁹²⁸ ⁹²⁹ ⁹³⁰ ⁹³¹ ⁹³² ⁹³³ ⁹³⁴ ⁹³⁵ ⁹³⁶ ⁹³⁷ ⁹³⁸ ⁹³⁹ ⁹⁴⁰ ⁹⁴¹ ⁹⁴² ⁹⁴³ ⁹⁴⁴ ⁹⁴⁵ ⁹⁴⁶ ⁹⁴⁷ ⁹⁴⁸ ⁹⁴⁹ ⁹⁵⁰ ⁹⁵¹ ⁹⁵² ⁹⁵³ ⁹⁵⁴ ⁹⁵⁵ ⁹⁵⁶ ⁹⁵⁷ ⁹⁵⁸ ⁹⁵⁹ ⁹⁶⁰ ⁹⁶¹ ⁹⁶² ⁹⁶³ ⁹⁶⁴ ⁹⁶⁵ ⁹⁶⁶ ⁹⁶⁷ ⁹⁶⁸ ⁹⁶⁹ ⁹⁷⁰ ⁹⁷¹ ⁹⁷² ⁹⁷³ ⁹⁷⁴ ⁹⁷⁵ ⁹⁷⁶ ⁹⁷⁷ ⁹⁷⁸ ⁹⁷⁹ ⁹⁸⁰ ⁹⁸¹ ⁹⁸² ⁹⁸³ ⁹⁸⁴ ⁹⁸⁵ ⁹⁸⁶ ⁹⁸⁷ ⁹⁸⁸ ⁹⁸⁹ ⁹⁹⁰ ⁹⁹¹ ⁹⁹² ⁹⁹³ ⁹⁹⁴ ⁹⁹⁵ ⁹⁹⁶ ⁹⁹⁷ ⁹⁹⁸ ⁹⁹⁹ ¹⁰⁰⁰

以上を要するに、¹⁰ ¹¹ ¹² ¹³ ¹⁴ ¹⁵ ¹⁶ ¹⁷ ¹⁸ ¹⁹ ²⁰ ²¹ ²² ²³ ²⁴ ²⁵ ²⁶ ²⁷ ²⁸ ²⁹ ³⁰ ³¹ ³² ³³ ³⁴ ³⁵ ³⁶ ³⁷ ³⁸ ³⁹ ⁴⁰ ⁴¹ ⁴² ⁴³ ⁴⁴ ⁴⁵ ⁴⁶ ⁴⁷ ⁴⁸ ⁴⁹ ⁵⁰ ⁵¹ ⁵² ⁵³ ⁵⁴ ⁵⁵ ⁵⁶ ⁵⁷ ⁵⁸ ⁵⁹ ⁶⁰ ⁶¹ ⁶² ⁶³ ⁶⁴ ⁶⁵ ⁶⁶ ⁶⁷ ⁶⁸ ⁶⁹ ⁷⁰ ⁷¹ ⁷² ⁷³ ⁷⁴ ⁷⁵ ⁷⁶ ⁷⁷ ⁷⁸ ⁷⁹ ⁸⁰ ⁸¹ ⁸² ⁸³ ⁸⁴ ⁸⁵ ⁸⁶ ⁸⁷ ⁸⁸ ⁸⁹ ⁹⁰ ⁹¹ ⁹² ⁹³ ⁹⁴ ⁹⁵ ⁹⁶ ⁹⁷ ⁹⁸ ⁹⁹ ¹⁰⁰ ¹⁰¹ ¹⁰² ¹⁰³ ¹⁰⁴ ¹⁰⁵ ¹⁰⁶ ¹⁰⁷ ¹⁰⁸ ¹⁰⁹ ¹¹⁰ ¹¹¹ ¹¹² ¹¹³ ¹¹⁴ ¹¹⁵ ¹¹⁶ ¹¹⁷ ¹¹⁸ ¹¹⁹ ¹²⁰ ¹²¹ ¹²² ¹²³ ¹²⁴ ¹²⁵ ¹²⁶ ¹²⁷ ¹²⁸ ¹²⁹ ¹³⁰ ¹³¹ ¹³² ¹³³ ¹³⁴ ¹³⁵ ¹³⁶ ¹³⁷ ¹³⁸ ¹³⁹ ¹⁴⁰ ¹⁴¹ ¹⁴² ¹⁴³ ¹⁴⁴ ¹⁴⁵ ¹⁴⁶ ¹⁴⁷ ¹⁴⁸ ¹⁴⁹ ¹⁵⁰ ¹⁵¹ ¹⁵² ¹⁵³ ¹⁵⁴ ¹⁵⁵ ¹⁵⁶ ¹⁵⁷ ¹⁵⁸ ¹⁵⁹ ¹⁶⁰ ¹⁶¹ ¹⁶² ¹⁶³ ¹⁶⁴ ¹⁶⁵ ¹⁶⁶ ¹⁶⁷ ¹⁶⁸ ¹⁶⁹ ¹⁷⁰ ¹⁷¹ ¹⁷² ¹⁷³ ¹⁷⁴ ¹⁷⁵ ¹⁷⁶ ¹⁷⁷ ¹⁷⁸ ¹⁷⁹ ¹⁸⁰ ¹⁸¹ ¹⁸² ¹⁸³ ¹⁸⁴ ¹⁸⁵ ¹⁸⁶ ¹⁸⁷ ¹⁸⁸ ¹⁸⁹ ¹⁹⁰ ¹⁹¹ ¹⁹² ¹⁹³ ¹⁹⁴ ¹⁹⁵ ¹⁹⁶ ¹⁹⁷ ¹⁹⁸ ¹⁹⁹ ²⁰⁰ ²⁰¹ ²⁰² ²⁰³ ²⁰⁴ ²⁰⁵ ²⁰⁶ ²⁰⁷ ²⁰⁸ ²⁰⁹ ²¹⁰ ²¹¹ ²¹² ²¹³ ²¹⁴ ²¹⁵ ²¹⁶ ²¹⁷ ²¹⁸ ²¹⁹ ²²⁰ ²²¹ ²²² ²²³ ²²⁴ ²²⁵ ²²⁶ ²²⁷ ²²⁸ ²²⁹ ²³⁰ ²³¹ ²³² ²³³ ²³⁴ ²³⁵ ²³⁶ ²³⁷ ²³⁸ ²³⁹ ²⁴⁰ ²⁴¹ ²⁴² ²⁴³ ²⁴⁴ ²⁴⁵ ²⁴⁶ ²⁴⁷ ²⁴⁸ ²⁴⁹ ²⁵⁰ ²⁵¹ ²⁵² ²⁵³ ²⁵⁴ ²⁵⁵ ²⁵⁶ ²⁵⁷ ²⁵⁸ ²⁵⁹ ²⁶⁰ ²⁶¹ ²⁶² ²⁶³ ²⁶⁴ ²⁶⁵ ²⁶⁶ ²⁶⁷ ²⁶⁸ ²⁶⁹ ²⁷⁰ ²⁷¹ ²⁷² ²⁷³ ²⁷⁴ ²⁷⁵ ²⁷⁶ ²⁷⁷ ²⁷⁸ ²⁷⁹ ²⁸⁰ ²⁸¹ ²⁸² ²⁸³ ²⁸⁴ ²⁸⁵ ²⁸⁶ ²⁸⁷ ²⁸⁸ ²⁸⁹ ²⁹⁰ ²⁹¹ ²⁹² ²⁹³ ²⁹⁴ ²⁹⁵ ²⁹⁶ ²⁹⁷ ²⁹⁸ ²⁹⁹ ³⁰⁰ ³⁰¹ ³⁰² ³⁰³ ³⁰⁴ ³⁰⁵ ³⁰⁶ ³⁰⁷ ³⁰⁸ ³⁰⁹ ³¹⁰ ³¹¹ ³¹² ³¹³ ³¹⁴ ³¹⁵ ³¹⁶ ³¹⁷ ³¹⁸ ³¹⁹ ³²⁰ ³²¹ ³²² ³²³ ³²⁴ ³²⁵ ³²⁶ ³²⁷ ³²⁸ ³²⁹ ³³⁰ ³³¹ ³³² ³³³ ³³⁴ ³³⁵ ³³⁶ ³³⁷ ³³⁸ ³³⁹ ³⁴⁰ ³⁴¹ ³⁴² ³⁴³ ³⁴⁴ ³⁴⁵ ³⁴⁶ ³⁴⁷ ³⁴⁸ ³⁴⁹ ³⁵⁰ ³⁵¹ ³⁵² ³⁵³ ³⁵⁴ ³⁵⁵ ³⁵⁶ ³⁵⁷ ³⁵⁸ ³⁵⁹ ³⁶⁰ ³⁶¹ ³⁶² ³⁶³ ³⁶⁴ ³⁶⁵ ³⁶⁶ ³⁶⁷ ³⁶⁸ ³⁶⁹ ³⁷⁰ ³⁷¹ ³⁷² ³⁷³ ³⁷⁴ ³⁷⁵ ³⁷⁶ ³⁷⁷ ³⁷⁸ ³⁷⁹ ³⁸⁰ ³⁸¹ ³⁸² ³⁸³ ³⁸⁴ ³⁸⁵ ³⁸⁶ ³⁸⁷ ³⁸⁸ ³⁸⁹ ³⁹⁰ ³⁹¹ ³⁹² ³⁹³ ³⁹⁴ ³⁹⁵ ³⁹⁶ ³⁹⁷ ³⁹

ように、「近親のオンボ」と「遠縁のオンボ」という二通りの解釈が生じたのではない。

以上の如き推論は、勿論、クオ、オンボなどの親族名称に関する多くの用語法を検討する中で、逐一検証されていかなばならないだろう。然し、少なくとも「オンボ」という語が単に「甥」だけを意味するのではないこと、及び「従兄弟・又従兄弟」をオンボの概念に含ませても必ずしも誤りではなさそうなこと、この二点は、以上の考察で明らかにされたと思われる。従って、第二代から第五代までの間の相統形態は、「ク・オン」相統であったとみなしても大過ないのではない。

ところで、ク・オン相統とは、前述したように、一家系が在家と出家の二系に分れ、両者が各々の機能を十分に果たす限りにおいて順調に継続された相統制度であった。然し、在家と出家の何れかに支障を来した場合、特に在家の側で血統が絶えかかるような事態に至った時には、この出家と在家のバランスが崩れて、ク・オン相統の形態を維持出来なくなることあったにちがいない。例えば、ドク派の第五代座主の場合がそれである。ドク及び「ニ」によれば、ギヤ家において第五代と同世代には

在家の者が一人もいなかった⁽¹²⁾ので、彼は出家者の身でありながらも、在家者としての役目を果たす必要が生じた。こうして第五代は妻帯し、子供を儲けてその子に相統させた。これがドク派における親子相統の最初である。以後、この形態は第二期に入って、第一四代がク・オン相統を復活させるまで続いた⁽¹³⁾。

然しながら、このような事情の下で生じた親子相統は、教義上妻帯が許されて当初から行なわれている密教系諸教団の親子相統とは、次の二点において性格が異なっていたと思われる。即ち、第一は、この場合の親子相統は便宜的なもので、ク・オン相統のいわば変則型であったのだから、事情が許せば再び正常型のク・オン相統に戻るはずのものであったにちがいないことである。事実、第二期の第一四代の時にク・オン相統が復活されている。第二に、教団主の妻帯とその結果としての親子相統は、やはりカギユ派の教義に反することであったから、このことに対するコンプレックスも当然あったであろうと思われる。従って、公的な記録類では、この親子相統について出来る限り触れないように努めたのではないだろうか。また触れる必要がある時には、たとい親子であっても、

従来通り「ク・オン」と記していたのではないだろうか。⁽¹⁴⁾
 例えば、第一〇代の伝記中に親子がク・オンとして記述されていたが、その理由は恐らく以上のようなものでなかったかと思われる。またク・オン相統が一貫していたと記述している *BC* の著者の意図も、同じカギニ派に属する教団の者として、案外以上のようなことにあったかもしれない。

さて、以上を要するに、第一期における本山座主の相統形態は、先ず第二代から第五代まではク・オン相統であつたであろうこと、次に第六代から第一二代までは、親子・兄弟相統であつたこと、そしてこの場合の親子・兄弟相統は、ク・オン相統のいわば変則型と言えるのではないかということ、この三点がほぼ判明した。

(iii) ク・オン相統の意義

先に述べたように、開祖ツアンバ・ギャレーは、カギニ派の教理に従い、受戒して生涯これを守つたので、彼には妻子が存在しなかった。それ故に、次代の座主は、彼の高弟たち、就中、六大弟子と目された高弟の中から選ばれて然るべきだつたと思われる。然るに、第二代座

主職に就いたのは、形の上では「筆頭弟子」(*chos-kyi-sas*)⁽¹⁶⁾であつても、実態は開祖の実家の者であつた。また第二代以後の座主職も、先の第一表に見たように、開祖の出身家系であるギャ家の血筋のみによって独占された。それでは、ギャ家出身の者たちが座主職に就いたのは、果して彼らが本当に宗教的資質に優れていたからであらうか。

この問題について、第一期(一二世紀末葉―一五世紀初葉)における教団の背景を見ると、教団主のあり方と関連して、先ず次の諸点が指摘されうる。即ち、第一に、ドゥク派では、早くも第三代の時に、開祖の示し残した規律が大いに乱れて、他教団との論争が頻発し、また論争中の一派との武力衝突によって、本山のドゥク寺が破壊した事件も起きたりした。⁽¹⁷⁾これらのことは、共に開祖の直弟子であつた第二代、第三代の両座主が、⁽¹⁸⁾少なくとも後者が必ずしも宗教的指導者として適任ではなかったことを示している。第二に、第一期を通じて、ドゥク派は、他の諸教団、特に所謂明代の八大教王の中の教団として大いに勢威を振つていたサキヤ、カルマ、ゲルク、バグモトゥなどの諸派と比較したら、やはり未だ問題に

ならない位に小規模な教団として留まった。このことは、勿論、聖俗両界における他の諸勢力との力関係によることが大であったが、その外に歴代座主に人材を欠いていたこともその一つの原因であったと思われる。第三に、第五代は教団の指導者として、戒律を遵守すべきであったにもかかわらず、実際には妻帯して子を儲けた。⁽²⁰⁾このことは、彼にとって何よりも自己の血統の維持が重要であったことを示している。

以上の三点によると、ギャ家出身の歴代座主は、必ずしも宗教的資質に優れていたから座主職に就いたわけではなかった。むしろ、教団主としての資格の有無にかかわらず、すぐれて相統制度それ自体に依拠しつつ、座主職を独占したのである。それでは、次の疑問として、彼らギャ家の者たちは、何故に座主職を独占したのであるのか。

といって、勿論、ギャ家一族が座主職を独占的に相統した際に、何らかの世俗的意図があったことを直接的に明示するような根拠は、どの史料の中にも見い出されない。然しながら、一家系によって教団主の独占的相統が行なわれた、という歴然たる事実を基に次の二点、即ち、

第一に、それ程裕福ではなかったと思われる開祖の実家にとって、教団内にあったはずの開祖個人の財産は無論のこと、教団の共同財産の管理権も大きな魅力であったにちがいないこと、第二に、ギャ家出身の歴代座主が、例えば、第五代が疫病対策に事寄せて、南部の土豪たちから一地区を接収したり、或いは第六代が元朝王室との結びつきを得て、一九〇〇戸を擁する寺領(chos sahn)を賜わったりして、第七代の時期に本山にはかなりの量の寺領が蓄積されていたと思われること、以上二点を考え合せれば、やはりギャ家一族が教団主の地位と特権を専有した背後には、何らかの非宗教的な意図があったことは、先ず疑いがないと思われる。

またこのように考えて初めて、ク・オン相統の制度的な意味、換言すれば、偶然に一回のみ行なわれたそれではなく、他に事情が変らない限り順次継続されるはずのそのの意味を理解出来るのではないだろうか。即ち、教団の教義に抵触せず、然し後に事情が変わって抵触しなければならぬ場合には、表面上それをつくりながらも、まさにいかにして教団主の世襲化、そして究極的には教団の権威及び財産の私物化を実現させるか、とい

う目的にこの形態の相統制度こそが最も適合的であった、
という点が十分に納得されるのではないだろうか。

さて、以上を要するに、カギユ派諸教団において、少
なくとも、今、検討したドゥク派の場合に限っても、
ク・オン相統はすぐれて世俗的な意味が込められた一種
の世襲制であったように思われる。そしてこのク・オン
相統こそが、超俗的出家者集団の中に世俗的要因を導入
させる一つの契機であり、更にこのことが何らかの形で、
教団それ自体の世俗化と教団主の特権階級化、延いては
宗教貴族制の成立に密接に関連し合っていたように考え
られるのである。

(1) G. Tucci, op. cit., p. 19.

(2) DN, f. 118 b.

(3) KG, pp. 418-419.

(4) GT, f. 14 b.

(5) 第二代から第二世代までの歴代座主の血筋、名称、生
歿年、座主職就位の順序及びその年、などに関する諸史料
の関係箇所は、第二表に一括して示した。なお、第一表の
系譜を作製するにあたって、諸史料の間に存した異同は、
次の諸点であった。(i) 第三代の座主職就位について、PK
は三三歳(一二三二)の時と言ふ、DN 及び RM は前代
の歿した三八歳(一二三七)と言ふ。DN 及び RM は、

第二表

史料 代数	DN	KG	PK	NT	RM	GT
第2代	f. 118b	p. 418	ff. 183 b-184 a	欠	pp. 18, 22, 24-25	f. 14 b
3	"	"	f. 184 a	"	pp. 21, 24-25, 28	欠
4	"	pp. 418-419	ff. 184 a-184 b	"	pp. 26, 28, 30	"
5	"	p. 419	f. 184 b	ff. 3 b, 4 a, 26 b	pp. 27, 30, 33	"
6	"	"	ff. 184 b-185 a	ff. 3 a, 4 a, 21 b	pp. 30, 33, 34	"
7	"	"	f. 185 a	欠	pp. 33, 34, 36	"
8	"	"	ff. 185 a-185 b	ff. 2 b, 3 a, 4 a, 26 b	pp. 36, 41	"
9	"	"	f. 185 b	ff. 2 a, 4 b	pp. 39, 41, 42	"
10	"	"	"	ff. 2 b, 6 a, 11 b	pp. 38, 42, 44	"
11	"	欠	"	ff. 1 a, 2 a, 3 a	pp. 42, 44, 45	"
12	欠	"	"	ff. 2 a, 3 a, 5 b	欠	"

前代の歿年を機械的に次代の就位年としているので、ここでは著者が同宗派の PK の説を採った。(d) 第六代の歿年は、DN, KG, RM に三七歳の一三二五年とあるが、PK と NT, vol. 2, f. 21b に三八歳の一三二六年とあるので、後者の説に従った。なお、第七代の座主職就位年は、従って一年繰り下った。(e) 第八代の就位年は、RM に前代の歿年としてあるが、然し、この年第八代はわずか三歳であり、且つ PK, f. 185a に一時本山は遠縁のオンポによって管理され、失策が多かったために、後に第八代が招かれて就位したとある。故に RM の三歳就位説はとれないので、ここでは一応不明のままに残した。(f) 第九代が異母兄の第一〇代より八歳も若いのに、先に座主職に就いた理由はよくわからない。名称から判断するに、第九代の名には、歴代座主の名に含まれる「センゲ」(Sengge, 獅子という意味) という語が含まれ、他方第一〇代の名には無いから、或いは第九代の方が嫡出であったのだろうか。(g) RM に、第一一代の歿後、座主職が三年間空位となり、ギャルワン (rGyal-dban, 実は第一三代座主であった) が誕生して直ちに座主職に就いたようだ、と記されている。然し、これは、RM 自体が DN の記述に盲従して、第一二代の存在を見落し、第一一代と第一三代を直結させたことによる。

(6) PK, f. 184b.

(7) PK, f. 183b には、第二代の出家前の名称が「オンポのサンギ」(Sams-rgyas dbon) であったと記されてい

る。

(8) PK, f. 185a.

(9) 山口瑞鳳「古代チベット史考異——吐蕃王朝と唐朝との姻戚関係——」(上)『東洋学報』第四九卷第三号、一九六六年二月、p. 8 及び註(27)。

(10) 例えば、一三世紀前半において有力な世俗的勢力は、サキャ派、ツェル派、ディゲン派 (iBrigun-pa)、ヤルン王 (Yar-khans jo-bo) などであったと言われている (G. Tucci, op. cit., pp. 7—9)。これらのうち、ツェル派は、古代王朝の時の名門の流れを引くツェル氏一族が牛耳っていた教団である。またヤルン王は、古代王朝の末裔であった。然し、これら二勢力は、同世紀中葉にサキャ派が政権を形成する過程で、何時の間にか衰亡していた。名門貴族の没落と新興貴族の台頭という社会上層部における、或いは下層までも含めての社会階層の上下運動がまだ続いていたようである。

(11) 古代において、「孫」という意味の「オンポ」と「外祖父」という意味の「シャンポ」(shan-po) の二つの語が対にされた「オン・シャン」という熟語があり、この語が単に「孫と外祖父」だけでなく、各々の子孫にまで延用された例が知られている (山口瑞鳳「古代チベット史考異」前出論文、pp. 8—10)。

(12) PK, f. 184a—184b には、第五代の兄 Sengge rab が出家して、sTod-jBrug 派本山の座主職を務めたと

記されているので、第一表に示されているように、第五代と同世代には在家者がいなかった。

(13) PK, f. 187 a.

(14) それでは PK は一体何故に歴代座主の親子関係を明記したのであるのか、という疑問も当然出てくる。然し、Smith *Byzantine* (E. G. Smith, op. cit., pp. 3) 第二期のドック派におつてギヤ家一族と化身の系統 (PK の著者もこの一人である) との間に微妙な対立があり、特に PK の著者は世襲制教団主に対する化身制転生ラマの優位を主張していた、とされているから、その理由は恐らくこの辺りにあるだろう。

(15) NT, vol. 5, f. 6a には、「ク・オン」が相次いで亡くなったために、彼が第一〇代座主職に就位した、と記されている。この文脈中の「ク・オン」とは、一三九〇年と一三九二年とに各々歿した第八代と第九代の両座主であった。従つて NT, vol. 5 の著者は、親子であった二人を「ク・オン」と記していることになる。

(16) DN, f. 118 b; KG, p. 418.

(17) PK, f. 184; KG, p. 420.

(18) PK, ff. 183 b—184 a.

(19) 佐藤長「明代チベットの八大教王について」(上、中、下)『東洋史研究』第二一巻第三号、第二二巻第二号及び同第四号、一九六二年十二月、六三年一〇月、六四年三月。

(20) PK, f. 184 b.

(21) Ibid, f. 184 b.

(22) Ibid, f. 185 a.

(23) Ibid, f. 185 a. 然し、第七代の歿後、遠縁のオンボが一時本山を預かったが、失策が多かったためにそれら寺領の大部分は失なわれてしまった、と同箇所が続いて記されている。

IV 結語

以上、ドック派教団の発展の過程を一応三期に区分した上で、そのうち諸史料の比較的集中している第一期(一二世紀末葉—一五世紀初葉)、即ち、開祖から第一二代までにおける相統形態を跡づけてきた。その結果、この期間における相統形態は、全体を通じてほぼ師弟相統の形をとりながらも、その実態は、ク・オン相統(第二代—第五代)と親子・兄弟相統(第六代—第一二代)の二つであることが判明した。結局、第一期における以上の如き相統は、その形態がク・オンから親子・兄弟に変わったが、ともかく相統制度として一貫していたのであり、その本質はすぐれて世俗的な意図が込められた世襲制であったと言うことが出来るであろう。

ところで、ドゥク派で行なわれたク・オン相統の内容は、従来考えられてきたような「叔父・甥相統」ではなかった。オンボの語義を吟味すると、この語には、(一)狭義の場合、甥、従兄弟、又従兄弟、(二)広義の場合、単なる父系の者、という二通りの意味があったようである。元来、オンボという語は「孫」の意味であったとされているから、オンボ概念にかかる推移の背後には、当然社会構造や家族制度の変動が存在したと思われる。本稿は、然し、この点についてほとんど明らかにすることが出来なかった。今後、これら社会上の動きとも関連させて、クオ、オンボなどの親族名称の実態を一層深く追求しなければならぬ。これが将来における第一の課題である。

次に、チベット南部の信者からの寄進や、元朝王室との結びつきによって、第七代の時期の本山にはかなりの寺領が蓄積された模様である。然し、第八代の時にこれら寺領の大部分が失なわれ、その後における教団の経済的基盤について必ずしも明らかではない。然しながら、ともかくこの第一期を通じて、ドゥク派は主として未だ貴族層に帰依者を得ていなかったことと、歴代座主に人材を欠いたことによって、小規模な教団として留まったようである。今後、教団主の相統問題と関連して、教団の社会的側面の一層の解明が要求される。これが将来に残された第二の課題である。

(一橋大学大学院博士課程)